

は し が き

本書は、映画を通してイギリスの歴史を辿ってみようとした試みである。前書『映画で楽しむイギリス文学』の姉妹編にあたる筈のものであったが、10年余りの遅れになってしまった。どの映画を選定するかということよりも、出発点である「映画」と「歴史」という組み合わせに編著者が尻込みしたのである。

映画と文学であればどちらもフィクションであることで、原作の荒筋と背景、映画との違いと映画の見所といった説明は、執筆者の裁量でかなりすっきりと書くことができるのだが、歴史、史実が絡むと、そこに含まれる出来事の内容と解説自体が私たちの参考にする書き手の歴史家によって異なることもあるので厄介な仕事になるなあ、という不安があったのである。2009年9月下旬に三夜連続で放映されたNHKのドラマ・スペシャル『白洲次郎』は、最後の最後の字幕画面に「このドラマは実話に基づくフィクションです」という文を流した。この言葉は本書に取り上げた殆どの映画に当てはまるものであるが、問題はその実話の中身である。おまけに、本書とペアである『映画で楽しむアメリカの歴史』（2000年刊行）が南北戦争、FBIといった50の事件を軸にして巧みに合衆国の歴史をまとめているのにたいして、イギリスの場合、国の歴史は王室の歴史と一体になるほどに複雑に絡み合い、王族が内乱、議会との政争、他国との戦争などすべてに関わっているため、映画の歴史関連情報を記述することが、またそれを確認する作業が一筋縄では行かない、という懸念を抱いていた。だが一方で英国には、ヘンリー2世を描く『冬のライオン』、トマス・モアとヘンリー8世との相克を辿る『わが命つきるとも』、名優ロレンス・オリヴィエのシェイクスピア歴史劇、といった優れた歴史もの映画の伝統があり、最近では『英国万歳』（ジョージ3世の狂気が軸となる映画）、『エリザベス』二部作、『クイーン』などの秀作が公開されて、本書を纏めることが急務となったのである。

だが実際、史実の記述とその確認についての作業は危惧したとおりの厄介であった。英国映画の特徴の一つは、濃密と形容してもいいほど人間の心理面を抉ることにあるが、そのドラマを前面に押し出したために、間違いなくフィクションだと思えるようなエピソードや誇張した人物描写を挿入するだけでなく、史実である事件の時期をずらしてしまうことさえあるのだ。現に『クイーン』の中で狩猟家たちに追い詰められて殺されてしまう孤高の大鹿と女王との邂逅、滑稽なほどに戯画化された夫君の偏狭さ、炙り出される

女王の孤立と尊厳、それを認識したブレア首相が発する同僚とダイアナ元王太子妃への怒り（本書8章の「ダイアナ」参照）は前者の例であり、後者の典型的な例は『エリザベス』にみられる。ノーフォーク公の謀反（1572）と処女王に対するフランス王の弟の求婚（1579）との順序を入れ替えているのだ（本書4章の「エリザベス1世」参照）。

映画はフィクションだと分っていながらも、編者たちを含めほとんどの執筆者は、英語を基盤とする言語教育や言語文化の教育・研究にたずさわっていて、英国史そのものを専門にしていなくても、映画の背景となる歴史上の出来事を解説するために幾冊かの歴史書を基本的な共通図書として参考にしてもらうことにした。同時に当然のこととはいいながら、扱う映画作品に応じて目を通された個別の参考書を数冊挙げてもらうことにし、大変な負担をかけることになってしまった。偏りのないバランスのとれた記述を目指したが、歴史を生業としていないので、思わぬ読み違いを犯しているかもしれない。読者諸賢の寛容なご叱正をお願いしたい。

各節一つの作品を4頁で論じることを原則にしたが、エリザベス1世の時代とかヴィクトリア朝、またIRA関係のように、扱う題材によって編者の方から願って頁を増やしたり、二つ以上の映画を同時に取り上げた節もある。そして特に独立して解説してもらったほうが良いと判断した話題については囲み記事欄を設けた。

原稿の大部分は一年以上も前に出揃ったのだが、編者たちの勉強が追いつかなくて完成が遅れ、執筆者の方々と金星堂にご迷惑をかけてしまった。おまけに昨年夏休み近くになって各映画の中から担当の執筆者に強く印象に残ったセリフ、映画のテーマ及びメッセージとおぼしきセリフを英語付きで書き入れてもらうことをお願いして、本書の完成を延ばしてしまった。ともあれ、すでに映画を見られた読者がそのセリフが発せられるシーンに思いを向けられたり、未見の方には映画の狙いを推測して頂けたら、そして本書に取り上げられた映画の中へ誘い込むことができたなら、執筆者も編者もうれしい限りである。

最後になったが、金星堂の佐藤求太氏には企画の段階から相談に乗っていただいただけでなく、編者と執筆者との原稿の往復、執筆の分量をめぐる両者の仲介、そして年表、挿入する図版、索引等の体裁など、本書の構成全体についての議論にも参加していただいた。本書にいくばくかの取り柄があるとすれば、氏の献身的貢献の賜物である。心より感謝する次第である。

2010年3月
編著者

全体に共通する基本参考文献一覧

青山吉信 編 『世界歴史大系 イギリス史 1 先史～中世』 山川出版社 1991.
今井宏 編 『世界歴史大系 イギリス史 2 近世』 山川出版社 1990.
村岡健次 木畑洋一 編 『世界歴史大系 イギリス史 3 近現代』 山川出版社 1999.
川北稔 編 『世界各国史 11 イギリス史』 山川出版社 1998.

安東伸介他 編 『イギリスの生活と文化事典』 研究社出版 1982.
高橋康也他 編 『研究社シェイクスピア辞典』 研究社 2000.
出口保夫他 編 『21世紀イギリス文化を知る事典』 東京書籍 2009.
森 護 編 『英国王室史事典』 大修館書店 1994.

狩野良規 『スクリーンの中に英国が見える』 国書刊行会 2005.
小池滋 『もうひとつのイギリス史』 中央公論社 1991.
佐藤賢一 『英仏百年戦争』 集英社新書 2003.
杉原啓史 『映画で楽しむ世界史』 近代文芸社 2005.

エイザ・ブリッグズ、今井宏、中野春夫、中野香織 訳 『イングランド社会史』
筑摩書房 2004.
D. マクドナル、大澤謙一 訳 『図説イギリスの歴史』 東海大学出版会 1989.

Cannon, John & Ralph Griffiths. *The Oxford Illustrated History of the British Monarchy*. Oxford UP, 1988.
Cannon, John ed., *A Dictionary of British History*. Oxford UP, 2001 (rev. 2009).
King, Edmund. *Medieval England: 1066-1485*. Oxford UP, 1988.
McDowall, David. *An Illustrated History of Britain*. Longman, 1989.
Morgan, Kenneth O. ed., *The Oxford History of Britain*. Oxford UP, 2001.
Strong, Roy. *The Story of Britain*. Fromm International Publishing Corporation, 1996.

目 次

第1章 古代	7
先史時代からアルフレッド大王まで /9	
七王国時代 /20	
コラム：英語で書かれた最古の叙事詩『ベオウルフ』の解説 /24	
アーサー王 /28	
第2章 中世前期	33
ヘンリー2世 /35	
ジョン王 /40	
十字軍 /44	
コラム：十字軍 /49	
エドワード1世 /51	
リチャード2世 /55	
第3章 中世後期	59
百年戦争 /61	
ジャンヌ・ダルク /66	
バラ戦争——王権をめぐる戦い /70	
第4章 テューダー王朝	75
ヘンリー8世 /77	
トマス・モア /81	
ジェーン・グレイ /86	
エリザベス1世 /90	
コラム：エリザベス1世 /94	
コラム：宗教問題と無敵艦隊の襲撃 /96	
シェイクスピア /97	
コラム：シェイクスピアの生涯 /101	
メアリ・スチュアート /103	
第5章 17世紀	107
植民地 /109	
ピューリタン革命 /113	
チャールズ2世 /118	

貴族の生活 /123

コラム：「ジェントルマン」と「ジェントリ」/128

第6章 18世紀 **129**

英国と植民地 /131

七年戦争 /137

イギリス海軍 /141

アメリカの独立 /146

中・上流階級 /150

第7章 ヴィクトリア朝 **157**

外交 /159

ヴィクトリア朝の教育と子ども /163

ヴィクトリア女王 /168

コラム：ヴィクトリア女王の内政と外交 /172

階級と世紀末 /175

観光旅行——Tourism /179

ボーア戦争 /183

第8章 20世紀 **187**

第1次世界大戦 /189

第2次世界大戦 /194

反抗する若者 /198

炭鉱不況と音楽 /202

ダイアナ /207

第9章 その他 **213**

アイルランド問題 /215

移民問題 /221

作家の伝記（同性愛）/225

作家の伝記（ナショナル・トラスト）/229

作家の伝記（児童文学）/233

コラム：イギリス児童文学の流れ——その系譜と歴史 /237

シングル・ペアレント——人は孤島か /239

索引 **243**